

# 音楽的要素の構造化を導く身体表現について：コンセプトマップによる分析を通して

著者	寺井 郁子
雑誌名	大和大学研究紀要
巻	4
ページ	55-64
発行年	2018-03-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1677/00000149/">http://id.nii.ac.jp/1677/00000149/</a>



## 音楽的要素の構造化を導く身体表現について —コンセプトマップによる分析を通して—

### Using Motive Expression to Structure the Study of Musical Elements —— Through Concept Map Analysis ——

寺井 郁子\*  
TERAI Ikuko

#### 要 旨

研究の目的は、学びの構造化を追究するために、音楽的要素の統合に音楽の身体化表現を経験知として挿入することによる可能性と課題を明らかにすることである。

次期学習指導要領においても、知識や技術が社会の中で汎用性を発揮できるように、構造化の視点を取り入れた専門性と関わる具体的にできるための指導が謳われている。したがって、本稿では音楽を形づくっている要素および音楽と身体表現に共有できる概念を連続体として構造化して授業実践を試みた。

現在、筆者が2年に渡って担当している授業の内容は、音楽を形づくる諸要素、曲想をつける指導と、時間・空間・エネルギーのイメージ化を伴う身体表現とを連動できるような幼稚園と小学校の教材曲を用いたグループ学習による授業実践である。その結果は、受講者が描いたコンセプトマップの分析により、音楽のフレーズと動きの方向性を関連付けること、曲想に関連するアゴーギクやアーティキュレーションを上下の方向性や動きの重みと関連付けること、音楽形式・拍子・ダイナミクスと隊形の変化と関連付けると、音楽の身体化表現が有効であることが明らかになった。また、身体表現と音楽表現の共有概念を深く理解するには、言葉の力を借りない音楽そのものから曲想を感じられる教材の方がふさわしいこと、実践的な学習のみならず鳥瞰的に鑑賞して教師と対話する方が効果的であること、バリエーションの構造化の際には、3概念を一度に盛り込むより、2概念までとする方が理解度が高いことも分かった。

#### Abstract

The purpose of this paper is to explore the structured combination of the elements of music through motive expression. The main revision in the upcoming version of the Education Ministry's "Curriculum Guidelines for Elementary School" is the modification of the concept of active learning to generally include the structured viewpoint. Therefore, this study considers structured viewpoints as inclusive of mutual concepts of both music and motive expression, as well as of musical components. In this study, we observe the integration of music elements and motive expression with imagination through group learning in music classes and the use of related materials in elementary schools and kindergartens. Through analyzing concept maps, we found three effective teaching methods which clarified the relationship between musical phrasing and motive direction, the relationship between moving weight or changing direction and musical articulation, and the relationship between the musical form or dynamics to formation by dancing.

Preferred learning materials are not program music like songs, but rather, absolute instrumental music, to foster deeper understanding of the connection between mutual concepts of both music and motive expression. Student viewing of relevant videos while interacting with their teachers is highly recommended. When structuring lesson variations, it is more conceivable to connect one to two key mutual concepts between music and dance per lesson than 3 key mutual concepts.

キーワード：身体表現、音楽的要素、コンセプトマップ、音楽の視覚化、バリエーションの構造化

keywords: motive expression, the elements of music, concept map, visualization of music, structuring variations

#### I. はじめに

小学校の次期学習指導要領に向けて、新たな3つの学力観—個別の知識・技能、思考・判断・表現力、学びに

向かう力—が示された。将来への汎用性のある学びにむかって、知識や技術の質を高める主体的な学びにより、何ができるようになるのかを明確にする必要がある。

\*大和大学教育学部

このような転換点において、音楽科としての専門的事項を踏まえた授業実践のための指導の構造化を導く身体表現について論じてみたい。

尚、本稿は、研究紀要第3巻に掲載した研究内容を踏まえた継続的研究である。

## II. 研究の目的

本研究は、次期学習指導要領を礎にして授業を実践することになる四年制大学の幼稚園および小学校教員養成課程の学生を対象とした授業の中で行った、音楽から知覚・感受したものを動的な身体表現に変換する実践例を挙げる。幼稚園・小学校において使用している教材曲を使用し、音楽を形づくる要素や曲想を身体で表現する実践である。

また、この授業の受講者が描いたコンセプトマップを手掛かりに、音楽表現と身体表現に共有する概念と、音楽の身体化表現のバリエーション（表現技法や空間デザイン）とが関連した音楽的要素について構造化された学びに繋がる身体表現について論じることである。

## III. 研究の方法

本研究における研究の方法を要約すると以下の4点である。

1. 表現分野における総合的観点の視座については、幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領、文献による理論的研究
2. 音楽的要素と音楽の身体化を関連づけた指導法については、大学の専門科目「初等音楽Ⅱ」「保育内容（表現Ⅰ）」「保育内容（表現Ⅱ）」等で得られた実践的研究
3. 授業実践については、コンセプトマップの分析
4. 音楽的要素の構造化については、文献研究
5. コンセプトマップ作成のキーワード選出に関して指標としたのは、文部科学省教育課程部会芸術ワーキンググループ第8回議事要旨（平成28年5月）、小学校学習指導要領第6節音楽（平成29年3月公示）、幼稚園教育要領比較対象表、小学校学習指導要領比較対象表（平成29年3月31日公示）である。

## IV. 研究の内容

### 1. 身体表現の定義

音楽科の授業で取り扱う身体表現は、楽曲の完成品を音楽と舞踊の技を駆使して作り上げることを目指すのではなく、個々のもつ内的衝動を出発点として音楽的要素が表現技術と相まって機能し、力が結集したところのみ創造的な音楽活動が成り立つと考える。

このことを踏まえて、筆者は、身体表現による音楽づくりを、音楽の身体化表現と定義づけている。

特に、平成29年告示された新小学校学習指導要領においては、「曲想と音楽の構造などのかかわりについて理解する」ことが新規事項として加わった。ここで、個別に存在していたリズム・音色・音楽記号などの音楽的要素の知識を、音楽におけるその働きと関わらせる経験知の場として音楽科の中で身体化表現を位置付けることによる。

### 2. 音楽表現と身体表現に共有する三つの概念

本稿では、新小学校学習指導要領（音楽）にとりあげられている下記の要素が、音楽の身体化表現により視覚化され、さらに要素の相互作用により、全体の音楽構造の中で音楽的要素が機能的に生きてくると考える。

#### 音楽を特徴づけている要素

音階、調、音色、リズム、旋律、拍  
フレーズ、音符、休符、記号や音楽にかかわる用語、音の重なり、和音の響き

#### 音楽の仕組み

反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横の関係

平成20年3月告示学習指導要領において、〔共通事項〕として、記載されている強弱、速度に、29年告示版で登場した「思いに合った表現」をするために必要となるアーティキュレーションを加えて論じる。

筆者は、次に掲げた音楽表現と身体表現に共有する概念①～③を音楽の働きと関連づける際に意識しながら習得しなければ、文字や記号の暗記や操作学習と化すと懸念している。

音楽を演奏する際に曲想をつけるために意識しなければならない3つの音楽的概念である①ダイナミクス<sup>1)</sup>、②アゴーギク<sup>2)</sup>、③アーティキュレーション<sup>3)</sup>は、身体化表現する場合も、身体化表現のバリエーションをデザインする際の共有概念となる。

組み合わせの数が増えるとより総合的な表現力が備わっていることになる。

特に、音楽の身体化表現のバリエーションをデザインする際には、「音楽を形づくっている要素」を教材に応じて定め、底流“音楽表現と身体表現の三つの共有概念”を意識しながら身体化表現を進める必要がある。

### 3. 先行研究から学習者の思考の方向性への進展

筆者は、拙著論文<sup>4)</sup>において、音楽を動的な身体表現に変換する指導のポイントとして、身体の向きとエネルギーの方向性について明確にすることを【ベクトル・ムーブメント】、どんな曲想を表現したいのかという意識づけを【モービルアーティキュレーション】、規則性のある枠組みの部分と、個々或いはグループのバリエーションの部分とを、教師が意図的に構成する時間・エネルギーを【バリエーションの構造化】と名付けて、述べた。

さらに、教師は子どもたちが音楽的要素を理解できるように導くために、次の具体的な指導法の原則も明らかにした。

- (1) 【ベクトル・ムーブメント】については、音楽のフレーズと身体表現の方向性（前後、左右、外向と内向）が対応したこと、
- (2) 【モービルアーティキュレーション】については、音楽の曲想に関係するアゴーギクやアーティキュレーションの概念を身体の方性（上下）や重さ軽さと関連させながら、学習者が認知すること、
- (3) 【バリエーションの構造化】については、音楽形式や拍子変化やダイナミクスと、隊形（formation）の変化と関連付けること、

以上、3つの観点を、意図的に音楽の身体化表現に採り込むことで、学習者は時間や空間・エネルギーを自然に音楽表現に生かすことができるようになる位置づけた。

### 4. 音楽の身体化表現に基づいた音楽形式をとらえる学習が思考力を育む可能性

R.カイヨワ<sup>5)</sup>によると、遊びは、子どもらしい原初的能力であるパイデアからルドウス（ルール）の要素が増すと高度な遊びになるのだが、音楽の身体化表現によるルールの習得、すなわち音楽を形づくる要素の理解は、将来自ら使える力となる。このような音楽の形式を意識して構造化を図ることにより、学習の全一性が高まり授業後も継続的に発展する自律的な学習として成立する。

さらに、音楽の授業における音楽的要素の学修を構造化する際に、フェレンス・マルトン氏が提唱している「学習の教授学理論」としての「バリエーション理論」<sup>6)</sup>を援用して述べる。

「バリエーション理論」は、音楽教育でも応用的に実践することが可能である。音楽形式（例：反復、呼びかけとこたえ）という不変の一定パターンを意図した音楽理論の学習を、隊形変化を伴った身体化表現に変換〔transform〕することで、学習者はダイナミクス（強弱）やアーティキュレーション（音の流れの感じ）を遊びのカテゴリーの変化を伴いながら学習の広さを増していくことができる。内的衝動を動的な身体表現に変換する手法を編み出す要となる“音楽表現と身体表現の共有概念”の組み合わせにより、前掲論文<sup>4)</sup>図表1.の縦軸で用いたパイディア（自由）とルドウス（規則性）の2極のエネルギーの多寡により、主体的な学びの“深さ”を増していくことが可能となる。

この音楽形式というルドウス（規則性）を身体化表現によって経験することで、プログラミング教育、ひいては、社会に出てからの汎用性への発展的可能性も期待できる。

## V. 音楽を形づくる要素を身体化表現する実践事例

### 実践A

学習者：グループA…平成29年度大学1年生（初等幼児教育専攻生で幼稚園教諭免許も取得希望者）

教材曲：エリック・カール作曲「できるかな？」

動物の特徴により、歌詞をアレンジしながら、曲想を身体表現に変換することで視覚化しやすい曲である。音楽形式は、ABAの二部形式である。

4拍子のA部分：レチタティーヴォ（語りの部分）とリズムを楽しむ部分

3拍子のB部分：原譜は、猫が背中をグンと伸ばす歌詞と曲想を楽しむ部分

既習事項

- ・音価、音色、リズム、和音、拍の流れやフレーズについて前時にリトミックの専門家による学習を経験している。
- ・正中線を超える動作は、3歳児には難易度が高いこと。
- ・音楽形式と隊形変化を一致する方法
- ・アゴーギクとリズム
- ・アーティキュレーションとエネルギーの多寡

ねらい：音楽形式とダンスの隊形の変化を対応させ、音楽形式を視覚的なダイナミクスで捉えること、上下運動のステップによりリズムに溜めとアーティキュレーションを視覚化できること、

身体を広げる動きにより曲想と拍子とアゴーギクを表現できるようになること、の3点である。  
※ねらいに則して、動物は表現しやすいものに変えて身体化表現することとした。

## 実践B

学習者：グループB…平成28年度大学1回生（初等幼児教育専攻生で幼稚園教諭免許も取得希望者）

教材曲：ブラームス作曲「ハンガリー舞曲第5番」

シューベルト作曲「即興曲第3番」

既習事項およびねらいは、実践Aと同様である。

筆者の担当授業を受講したAグループとBグループの学生が、学習前と学習後に作成したコンセプトマップを分析し、身体表現を介した学習によって質的变化がどのように見られたのかについて、また、AグループとBグループの違いについて考察したことを、まとめる。

### 1. コンセプトマップによる実践の分析

ノヴァック（Novak,J.D.）<sup>7)</sup>らを中心に1970年代に開発されたコンセプトマップ（概念地図）は、認知構造の外化による教授技術の検証法として、名高い。わが国でも1990年代前半以降、使われているが、音楽教育における報告は、極少ない。しかし、音楽教育の分野においても、学習者の意識が、歌う、楽器といった行為や物体にあるのか、音楽的要素の学習の内容や各々の結びつきをコンセプトマップに描きリンク付けすることで、学習者の音楽的思考の方向性の変化を読み取ることができるので、とても有効な方法である。学習前後に描いたコンセプトマップの比較、および音楽やダンスを得意とする学生とクラス全体との比較をする際に得点化の手法をとるために、概念の階層表が必要になる。この階層表により、音楽的要素の構造化を導くためのルーブリックを作成への必要条件が明確になると考える。

今回の実践では、大学入学後の身体表現を含んだ音楽の授業前と、授業後にコンセプトマップを描き、これを筆者がノヴァックの得点化<sup>10)</sup>を参考に解釈した。

グループA Bとも、学習前のテーマは「音楽を形づくる要素とは」とし、学習後のテーマは「音楽を形づくる要素を身体表現で学ぶとは」と提示した。

コンセプトマップ作成の手順は、以下のとおり文章と口頭により説明した。

手順①このテーマに対して思い浮かぶ関連ある概念や知識を書き込む。以下のキーワードは、できるだけ含められるよう紙面で提示した。

グループA Bともに提示した26のキーワード

音色、リズム、旋律、音階や調、音の重なりや和音（声）の響き、音楽理論、音楽を特徴付けている要素、反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横の関係、音楽形式、音楽の仕組み、強弱、ダイナミックス、速度、アゴーギク、拍（の流れ）やフレーズ、音符、休符、記号や音楽にかかわる用語、アーティキュレーション

グループBにのみ追加提示した13のキーワード

音、形、色、自然、生活、社会、イメージ、思考、判断、表現、自分なり、曲想、音楽の構造

平成30年度からの幼稚園教育要領、及び、平成29年3月公示 音楽科 小学校学習指導要領に則したためグループAとBに提示したキーワードが異なる。

手順②矢印でつなぐ（＝リンク）

手順③矢印のそばに意味するところを簡単な説明語句で記入する。



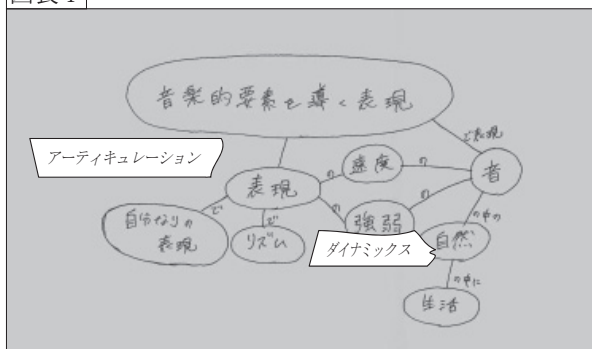
(1) グループA (4～5名から構成される47名を10グループに分ける。平成29年10月作成)

大学の専門科目「初等音楽Ⅱ」「保育内容(表現Ⅰ)」「保育内容(表現Ⅱ)」のうち、「初等音楽Ⅱ」においては、身体表現2時間のうち、1時間を履修済みである。身体表現の内容は、リトミックの手法による音価・8つの基礎リズム。「保育内容(表現Ⅰ)」においては、身体表現に関連する内容の授業3時間のうち、1時間目の学習前後でコンセプトマップを描いた。「保育内容(表現Ⅱ)」は未修である。

グループ編成は、50音順の出席番号の近い学生である。

教材曲は、この時点では、「できるかな?」(エリック・カール著『いっしょにうたおう!エリック・カール絵本うたソングブック 楽譜』より)のみである。この曲は、A B Aの音楽形式に構成されており、A部分が4拍子、B部分が3拍子で作曲されている。授業の中で、歌詞(動物の特徴)の力を借りながら踊りをグループごとに創作する前に、音楽形式と踊りの隊形(Formation)を関連付ける手法、動物の特徴と動きのアーティキュレーションを関連付ける手法、のヒントを提示した。

図表1



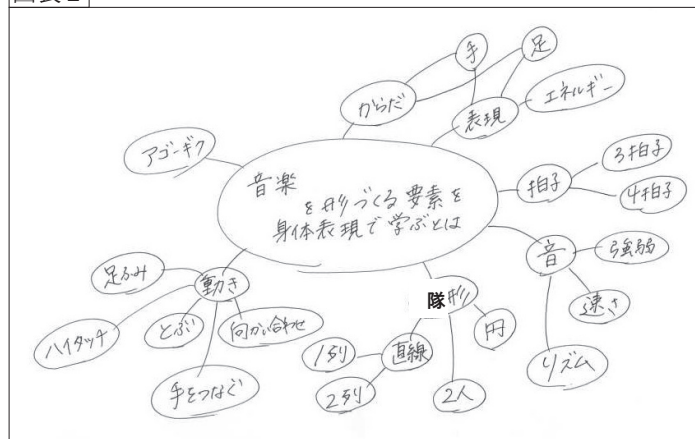
【学習前(10グループの平均値16.4図表5参照)】

作成に当たり提示した39のキーワードのうち、平均5個が登場した。その中で関係性を結ぶことができる単語は2個である。

また、曲想をつけるために不可欠であり、人が生きる内的衝動リズムを表現活動に昇華する意味において共有することのできる3つの概念——ダイナミクス、アゴーギク、アーティキュレーション——は、単語としては登場しないが、内容的には形容詞や「自分なりの」という言葉で代用して、ダイナミクス、アーティキュレーションに関する言葉が描かれている。

しかし、曲想の変化として表現できるための対の単語としては登場していない。(図中のイタリック体文字は筆者の解釈による加筆)

図表2



【学習後(10グループの平均値20.8)】

大きく質的な変化が読み取られるのは、学習前は、音・色・音符などの単体が上部に描かれていたが、学習後は、動きの実際や、三つの共有概念が上部またはテーマの周りに描かれるようになった。教材曲では、三つの共有概念——ダイナミクス、アーティキュレーション、アゴーギクすべてを学習したが、3概念すべてコンセプトマップに記入したグループはなく、得点の高いグループでも2つしか記入されなかった。三つの共有概念のうち、活動を通じて理解度の高いと思われるものは、速度に関連するアゴーギクであった。

音楽を形づくる要素は、4個のキーワードで個数は同じであるが、具体的な動きに関する例となる言葉の枝が増した。

(2) グループB (3名が1グループとなり、平成28年9月に作成)

大学の専門科目「初等音楽Ⅱ」「保育内容(表現Ⅰ)」「保育内容(表現Ⅱ)」のうち、「初等音楽Ⅱ」においては、身体表現2時間のうち、全てを履修済みである。身体表現の内容は、リトミックの手法による音価・8つの基礎リズムを1時間、音楽的要素の身体化表現の手法により拍・拍子・フレーズ・音楽の形式を1時間履修済みである。「保育内容(表

現Ⅰ)」においては、身体表現に関連する内容の授業3時間を、「保育内容（表現Ⅱ）」においても、3時間を履修済である。

グループ編成は、音楽や身体表現を好む積極的なタイプで、コンセプトマップを描くことに授業外の時間の協力の労を惜しまない学生である。グループAの学生より学年は一年上である。

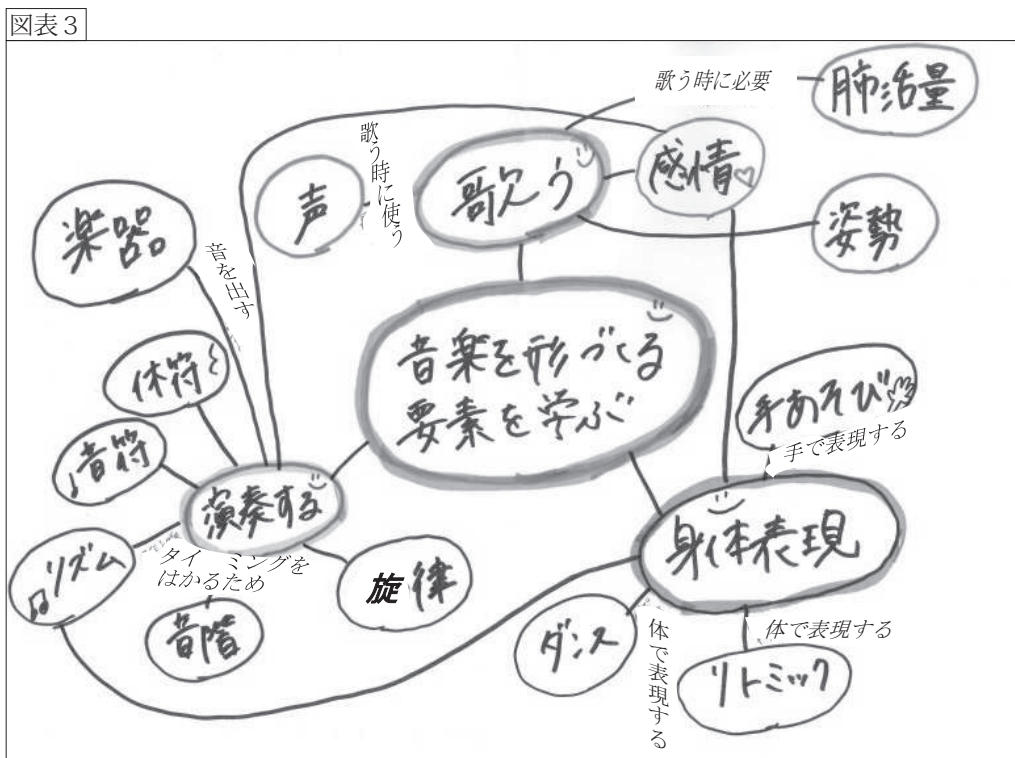
教材曲は、鑑賞教材である「ハンガリア舞曲」「ラブソディーインブルー」の身体化表現による学習をした印象が強いことがわかる。こちらの教材曲は、歌詞などの言葉の力を借りることができない楽曲である。

何をするのか（「歌う」「身体表現」「演奏する」という行為ではなく、音楽的要素が中心に据えられている。音楽的要素を表現と鑑賞の共通事項として捉えられている。

学習前に比べて大きく質的な変化が読み取られるのは、曲想をつけるために不可欠で音楽と身体表現に共有することのできる3つの概念——ダイナミクス、アゴーギク、アーティキュレーション——がすべて登場していることである。さらに、アーティキュレーションとアゴーギクは、エネルギーの面でも捉えられている。

音楽を形づくる要素は、12のキーワードに増加した。

学生からは、「授業に参加しただけに終わらず（マップ作成に当たり）授業の映像も見ることで（音楽を形づくる要素と身体表現の）つながりを考えることができた。」という言葉が聞かれた。



【学習前】図表3 何をするのか（「歌う」「身体表現」「演奏する」ということを中心に据えている。

音楽を形づくる要素は、コンセプトマップ作成に当たり提示した26のキーワードのうち、5個が関係性を結ぶことができる単語として登場した（図中の明朝斜体文字は学生によるリンクづけの理由である。ゴシック斜体文字は筆者による誤字訂正による。）。

また、曲想をつけるために不可欠であり、人が生きる内的衝動リズムを表現活動に昇華する意味において共有することのできる3つの概念——ダイナミクス、アゴーギク、アーティキュレーション——は、一つも描かれていない。

【学習後】次頁の図表4

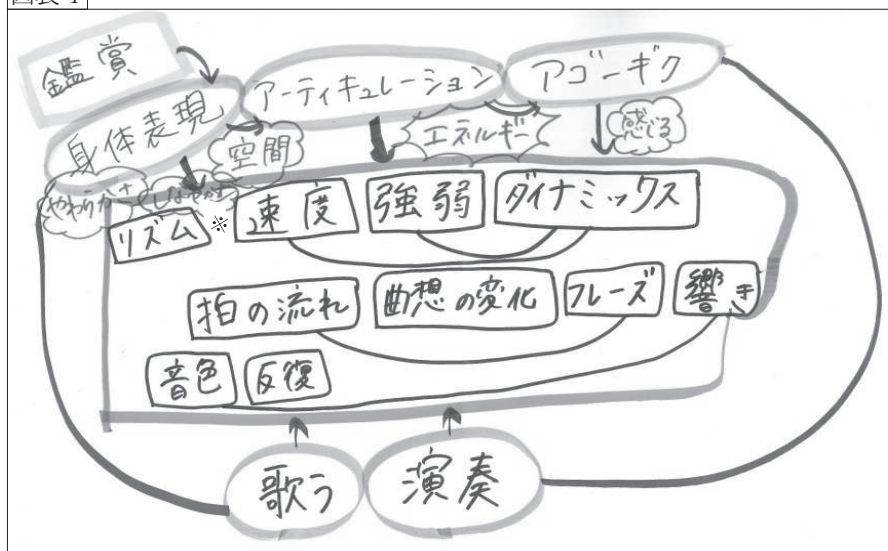
何をするのか（「歌う」「身体表現」「演奏する」という行為ではなく、音楽的要素が中心に据えられている。音楽的要素を表現と鑑賞の共通事項としての的確に捉えられている。

学習前に比べて大きく質的な変化が読み取られるのは、曲想をつけるために不可欠で音楽と身体表現に共有することのできる3つの概念——ダイナミクス、アゴーギク、アーティキュレーション——がすべて登場していることである。さらに、アーティキュレーションとアゴーギクは、エネルギーの面でも捉えられている。

音楽を形づくる要素は、12のキーワードに増加した（図表4の文字はすべて学生による記述である。※は“しなやかさ”である）。

学生からは、「授業に参加しただけに終わらず（マップ作成に当たり）授業の映像も見ることで（音楽を形づくる要素と身体表現の）つながりを考えることができた。」という言葉が聞かれた。

図表4



## 2. コンセプトマップの得点化の結果と考察

グループA、Bともに学習前に比べ、学習後は合計点が増加した[図表5]。グループBは5倍の得点となった。各々の得点化基準においては、概念の階層化が顕著に表れ、学習後は階層を超えた横断結合も増えた。Aは小結合と例示等の特定の事象の数がわずかに増加した。以下の集計結果から、受講学生の質的な——学習前は、楽譜・物・音楽を形づくる要素・音楽行動が分離した理解であったが、学習後は、音楽を形づくる要素と、音楽表現と身体表現の共通概念が、円環的に活性化し創造的な表現活動が成立するという理解へという——変化がグループBにおいて顕著に読み取ることができる。

図表5

得点化基準	単得点	Aグループ										Aグループ 学習前 平均値	Bグループ										Bグループ 学習前 平均値	Bグループ 学習後
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
有効な概念数	1点	11	5	2	0	1	2	3	11	11	4	5	11	8	4	2	2	1	3	11	15	6	6.3	17
階層	5点	10	10	0	0	0	0	0	15	15	5	5.5	15	15	0	10	0	0	5	5	15	10	7.5	10
横断結合大	10点	0	5	0	0	0	0	10	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	10	0	1	0	10
横断結合小	2点	6	2	0	0	2	3	0	2	4	2	2.1	6	4	0	0	2	4	0	2	4	6	2.8	4
例:特定の事象	1点	3	0	2	1	1	3	5	2	1	0	1.8	0	0	0	2	5	3	3	5	6	8	3.2	4
合計点		30	22	4	1	4	8	18	30	36	11	16.4	32	27	4	14	9	8	11	23	50	30	20.8	45

理論上可能な合計点のレンジは、最大134点、最低0点である。

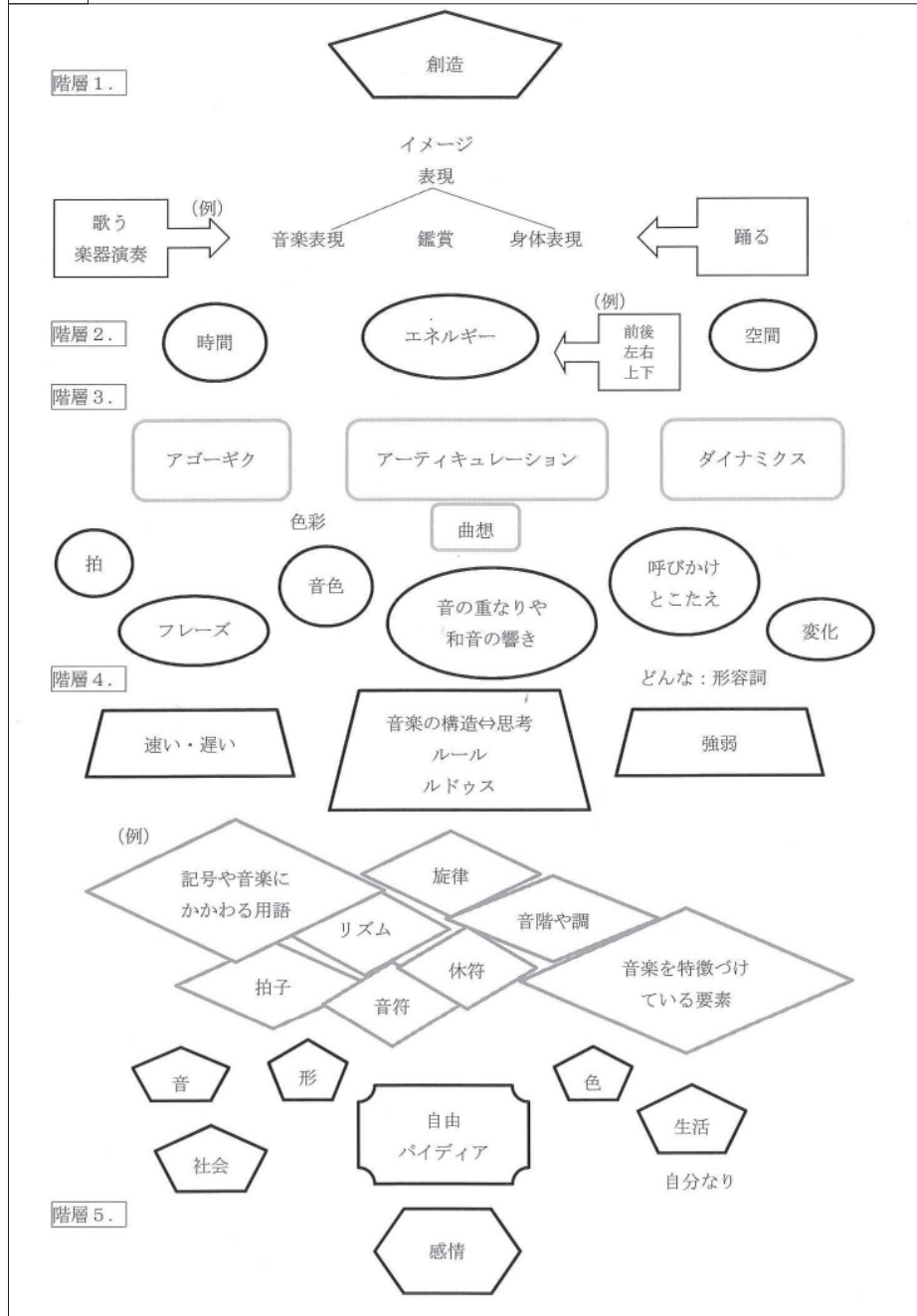
AグループとBグループの得点差は、授業を担当者の立場で考察すると、学習時間の多寡、学習内容の深さ、科目を超えて理論と実践を総合的に学ぼうとする学生の意欲と、そのための構造化などが、影響していると考えられる。Bグループのみに行ったのは、自分のクラスにおける実践だけではなく他のクラスの授業実践をビデオで観ながら、筆者と



鳥瞰的に対話したことである。そのことにより、音楽の身体化表現の活動の構造を意識化することが比較的できたと考ええる。

但し、グループA Bとも学生には、下記図表6の提示はしていない。

図表6



概念の階層に関して、音楽科の場合、各階層が相互に重なり合っていたり、立体的に関連しあっている。、実施した授業の内容と新学習指導要領（平成29年3月公示）にあるキーワードを用いて、『研究紀要第3巻』拙著論文に掲載した表を改訂したものである。図表6の通り階層基準を作成し、得点化した。図表5と照らし合わせると、同じ階層の中で横断結合がされている場合や、階層を超えて正しい関連付けが線で結ばれていると得点になりやすい構造になっている。特定の事象でもなく、有効性の認められない概念は、描いても得点化されない。

## VI. 結論と今後の課題

【バリエーションの構造化】については、プログラミングの思考にもつながる大切な学習であるが、一見、活動への取り組みが主体的であっても概念の理解が浅い学習になってしまう懸念がある。しかしながら、AグループとBグループのコンセプトマップの比較により明確になった以下の3点を、音楽的要素の構造化の際に意識することで、深い学習へと向かう可能性がみえてくる。

①三つの共有概念については、グループBのように1教材曲に2概念までに限定した内容を4時間程度かけ、それを鳥瞰的に鑑賞する学習の場を設定すれば、音楽の身体化表現による深い学習が可能となること<本文V-2.>

②三つの共有概念を確実に感得するためには、言葉の力を借りない教材曲(グループB)の方が優位であること<本文V-1.(2)>

③授業者が予期しなかったアーティキュレーションと拍子のリンク付けがグループAで見られたのは、音楽を身体化表現することにより、メロディーと拍子という複数の音楽的要素を統合して、空間の中でエネルギーを感じながら視覚化できることに起因すること<本文V-1.(1)>

このように、幼稚園の表現領域及び小学校音楽科の授業において、①②の点を留意すると、③のような予期しない学修効果をも期待できる。

しかしながら、コンセプトマップを書くときに提示するキーワードについては、教材曲やその目的に応じて、厳選して提示する必要があることは、今回の実践の反省事項として挙げられる。

今後は、身体表現を含めたルーブリックを作成することを将来的構想としながら、音楽表現と身体表現を往還的に扱うことが効果的な教材例と手法の事例の集積、そしてその検証と類型化をさらに音楽科で積み上げる必要がある。

## VII. 謝辞

本論文執筆にあたり、コンセプトマップ作成に関して私の担当授業の受講生50名による協力が得られたことを、心より感謝している。

## VIII. 注・引用文献

- 1) ダイナミクスとは、音量の大小による曲想の変化であるが、身体表現にも共有する概念である。
- 2) アゴーギクとは、情感のこめられた音楽的な表現にするためのテンポ内における微妙な速度変化であるが、身体表現にも共有する概念である。
- 3) アーティキュレーションとは、切ったり繋げたりするフレーズのまとめ方に関する変化であるが、身体表現にも共有する概念である。
- 4) 寺井郁子(2017年3月)『大和大学研究紀要』第3巻 pp.119-130
- 5) R.カイヨワ著 清水幾太郎・霧生和夫 訳 (1983第16刷)『遊びと人間』pp.55
- 6) 松下佳代 (2016第1版第7刷),『ディープアクティブラーニング』勁草書房,第2章,第3章に寄稿されている(「」は松下佳代氏による訳語を引用。
- 7) J.D.ノヴァック&D.B.ゴウウィン著,福岡敏行&弓野憲一 監訳(1992)『子どもが学ぶ新しい学習法——概念地図法によるメタ学習——』東洋館出版 pp.46. pp.109

## IX. 参考文献

- 1) 無藤 隆 (2019)『アクティブな学びと教師力・学校力』図書文化
- 2) Olivia N. Saracho (2012) : An Integrated Play-based Curridulum for Young Children.

